

06【街の散策からの気づき発見】

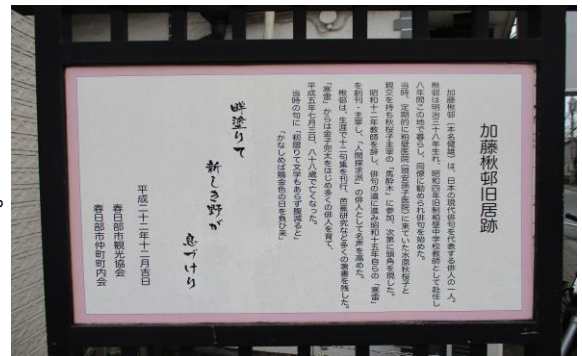
加藤楸邨 旧居跡の看板

会員 K.T.

春日部駅東口仲町集会所の所に「加藤楸邨旧居跡」の看板が設けられている。加藤楸邨(しゅうそん・1905～1993)は現代俳句を代表する一人だが、俳句に興味があっても、知識がない人には、わかりにくい説明だ、と気づいた。

<看板概要>

「加藤楸邨は昭和4年(1929)旧粕壁中学校教師として赴任した。当時、定期的に粕壁医院(現安孫子医院)に来ていた水原秋桜子と親交を持ち、秋桜子主催の「馬酔木」に参加、俳句の頭角を現した。(中略)昭和12年(1937)、教師を辞し、俳句の道に進んだ。(後略)」



楸邨(しゅうそん)・秋桜子(しゅうおうし)とは、読めないのではないか。道路に面したこの場所は、学校通りで、小学生や中学生の通学路でもあるので、看板の説明には“るび”を振ったほうがいい。また、“水原秋桜子”とはどんな人なのか、の説明を加えた方がいい、俳句は17音の短詩型文芸で、日本が発明した世界一短い詩、すばらしいアートだということも加えると、「アートの街づくり」の趣旨に沿うのではないか、などと、勝手ながら思った。秋桜子のことをウィッキーペディアで調べると、

みずはらしゅうおうし たいしょう しょうわじだい はいじん とうきょう にう まれ とうきょうていこくだいがくこくま とうきょうだいがく
「水原 秋 桜子(1892～1981)大正・昭和時代の俳人。東京に生まれる。東京帝国大学(今の東京大学)

いがくぶ そつぎょう たかはまきよし でし しゃせい しゅ ほととぎすは く はいくざっし「
医学部を卒業。高浜虚子の弟子となったが、写生を主としたホトギス派の句にあきたらず、俳句雑誌『

あし び」 そうかん かつやく かんじょう きんだいてき かんかく ひょうげん くしゅう
馬酔木』を創刊、その中心となって活躍した。ゆたかな感情を明るく近代的な感覚で表現した。句集に

かつしか「そうりん」
『葛飾』『霜林』がある。」

このようなことを加えると、秋桜子と馬酔木のことがわかりやすいと思う。他に「なぜ？」と気づいたことは、春日部市と俳諧の関係だ。俳諧は昔から盛んだっただろうか、調べると、春日部市編集の『新編目録 春日部の歴史』平成28年第4節に、粕壁宿近郊での俳諧との関連記載があった。これを咀嚼すると、

「市域の人々に俳諧が広がるようになったのは18世紀中ごろから、宝暦(1751～1764)頃、江戸談林派で粕壁宿米問屋伊勢平に逗留し、没した増田眠牛(みんぎゅう)や谷原新田の名主中村敲石(こうせき)はその担い手の端緒、その後、地域の俳諧文化を担ったのは、葛飾蕉門と多少庵の二つの俳諧グループであった。

葛飾蕉門は、江戸の俳人溝口素丸(1713～1795)に師事するものたちが埼玉県域の東南部に多く展開し、春日部地域では備後村や大畑村などがその中心であった。(中略)多少庵グループは(芭蕉の流れをひく江戸俳諧結社の一つ)、葛飾蕉門と同じ頃に広がり、百門中村(現・宮代町)の名主島村鬼吉が多少庵の名跡を継承したことで、天保年間(1831～1845)以降に春日部市域でも盛んとなる。両社の系譜をひく俳人たちは互いに交流を結び、俳書や俳額などにその足跡を残した。(後略)」と、ある。

多少庵・葛飾蕉門は、ともに芭蕉系譜をひくことから交流を結んだのだろう。春日部市は粕壁宿の江戸時代から文化的な素養を持つ地域のひとつであったようだ。俳諧は俳句や連句(数人で句を詠む)等の文芸の総称で、江戸時代(1603～1868)は庶民の娯楽の代表だったらしい。俳聖松尾芭蕉(1644～1694)は、「俳諧は老後の楽也」、という。その意味は、享保4年(1719)芭蕉門人・支孝の俳論書解説によると、

「若き時は、友達おほく、よろづにあそびやすからんに、老いて世の人にまじはるべきは、ただこの俳諧のみなれば、これは虚実を媒(な)かだち)にして、世情の人和とはいえるなり。」、と説明している。現代においても、俳諧・エッセイ・絵画・音楽等、芸術に関わることは、アートを媒体に老後の楽しみになると思う。